

「ヒーローになるの
は俺に決まってるだ
ろうがっ！」

大高
晴輝

【あらすじ】

小さい頃から境勇氣（9）が憧れていたのはテレビの中で活躍する特撮ヒーローだ。そんな彼は、小学校、中学校と学校や遊びに行つてはヒーローの話ばかり。楽しく順風満帆な学生生活を送っていた。しかし、高校生となった勇氣に災厄が訪れることとなる。

それから一年後、勇氣は『八ノ谷高等学校』へ転校。そこで、出会ったのが神藤光一（17）。

ある日、光一から一つの誘いが来る。光一が監督する作品『僕たちの青春ヒーロー』の出演オファーだった。光一の熱い気持ちに魅了された勇氣は、台本を読むことに。しかし、勇氣はオファーを一度断ってしまう。

同じ頃、この学校にも事件が起きようとしていた。光一の大切なデータが同じ部活に所属している小森隼（17）によって盗まれてしまうのだった。

一方勇氣は、過去を夢見た。今亡き親友の大木正義（16）との学生生活だ。優しく、賢く、かっこいいまさにヒーローのような男。彼との輝かしい日々は、嫉妬や悪意によって壊されることとなる。暴力でしか解決できなかった勇氣は、周囲を遮断し、ヒーローの資格がないと挫折することへ。

夢を見た勇氣は涙した。そんな時に出会うのが本郷響（53）だった。彼は勇氣に問いかける。「いつまでそうしているつもりだい？」と。答えを出せなかった勇氣に、本郷は導く言葉を贈る。本郷の言葉に感化された勇氣は、憧れだったヒーローへの想いを再びたぎらせることに！迷うことをやめた勇氣は、光一の元へ駆けつける。

一方で、光一はデータを必死に探している最中、犯人が小森だということを知る。光一の才能に嫉妬した小森の犯行は止まらない。彼を止めるため、助けを必要とする友人のため一人のヒーローが誕生するのだった。

【人物関係表】

・境 勇氣（9）（14）（16）（17）…高

校二年生。ヒーロに憧れながら

も葛藤する青年。

・神藤 光一（17）…勇氣のクラスメイト。

映像制作部部长。

・花村 飛鳥（17）勇氣のクラスメイト。

・境 真美子（37）（45）…勇氣の母。

・小森 隼（17）…映像部部員。

・尾田 くらら（16）…映像部ゴースト部員。

・大木 正義（16）…（故人）勇氣の親友。

○職員たち

・和泉 真希（25）…勇氣の担任教師。国語。

・五十嵐 真司（33）…数学教師。

・若林 泰明（41）…映像部顧問。科学教師。

・大竹 勝政（38）…体育教師。

・鈴木 美沙子（42）…社会教師。

・本郷 響（53）…理事長。

・食堂のおばちゃん（42）

・トウベエ（4）…本郷の飼い犬。パグ。

○劇中特撮劇

獣聖拳じゅうせいけんライオンベラー

・ライオンベラー…勇気の憧れのヒーロー。

・悪役…劇中冒頭の怪人。

・ラスボス…シーズン3のラスボス。

・ヒロイン(21)…劇中特撮劇のヒロイン

○その他

・友達A(9) ・母親(34)

・友達B(14) ・警官(30)

・男子生徒A(17) ・ひったくり犯(36)

・男子生徒B(18)

・男子生徒C(16)

・彼氏生徒(17)

・女子生徒A(18)

・女子生徒B(18)

・体育教師(33)

・不良A(17)

・不良B(16)

・不良C(17)

・子ども(7)

○ 境勇氣（9）の部屋（夜）

夜な夜な夢中で特撮番組『じゅうせいけん獣聖拳ライオンベラー』を観ている勇氣（9）。
勇氣は、腰に変身グッズを身につけており、部屋中におもちゃやDVDが散乱している。

【劇中特撮劇 じゅうせいけん獣聖拳ライオンベラー】

○ 山（爆破スポット）（昼）

ライオンベラーと悪役が戦闘中。
戦闘終盤ライオンベラーが決め台詞と共に悪役を倒そうとする。

ライオンベラー「俺の雄叫びが大地を揺るがすぜ！」

と、決め台詞を放ち、必殺パンチを悪役に繰り出す。

必殺技を受けた悪役は見事に爆破する。

○ 勇氣（9）の部屋（夜）

勇氣「うおおおお！ かけええ！」

目を輝かせながら大きな声で言った。

境真美子（37）声「ちよっと！勇氣！いつ

まで起きてんの！早く寝なさい！」

一階から勇氣の母、真美子の声がする。

勇氣「やっべ！」

勇氣は慌てて、テレビと照明を消して

布団に入った。

真っ暗になった部屋で、変身グッズが

音を出して光る。

真美子声「勇氣！！」

○公園（昼）（勇氣9歳）

公園で友人たちとヒーローごっこをし

ている勇氣。

勇氣（17）N「俺はあの頃夢中だった。正

義のヒーローに」

勇氣「いくぞ！必倒奥技！正義の拳！」
ひつとうおうぎ ジャステイスフイスト

友達A「うわああ」

勇氣「決まった（ドヤ顔で）」

○遊園地・ヒーローショー（昼）（勇気9歳）

記念撮影でライオンベラーと握手をし
ている勇気。

勇気N「小さかった俺の手を優しく両手で握
手してくれたのを覚えている。ヒーローの
手は大きかった。あまりのたくましさに感
動したのを覚えている」

○通学路（夕方）（勇気14歳）

ヒーロー好きの友人と帰っている勇気。
二人は雑誌を見ている。

勇気N「中学になると同じ特撮好きのダチも
できた。放課後は決まって最強キャララン
キング決めだ」

友達B「やっぱストライクフアングの方が強
いって！」

勇気「いや、ライオンベラーには勝てない
ね」

友達B「えー、そうかなあー」

勇気「（食い気味に）そうだとも」

勇気N「そう、ライオンベラーが最強なんだ。

これは譲れねえ。まあそんな感じで、ヒーローに憧れながら俺は生きてきた」

○路地裏（夜）（土砂降り）（勇気16歳）

土砂降りの中、拳から血を流している
ボロボロの勇気。

周囲には同じく、ボロボロになった男子高校生が三人横たわっている。

勇気「（息を荒げている）はあはあ」

勇気N「あの時までには…」

勇気は力尽きて倒れる。

○八ノ谷高等学校・食堂（昼）

T（一年後／現在）

勇気（17）が通うことになった高等学校。

勇気と神藤光一（17）が食堂の列に並んでいる。

カツカレーの食券を強く握りしめ、カ

ウンターに強く出す勇氣。

勇氣「おばちゃん！カレー大盛りで頼むね」

食堂のおばちゃん「別料金。プラス200円」

勇氣「げっ！？あ、そうなの？ちよい待ち」

勇氣は財布を開くが、中身はスカスカ。

勇氣M「げっ！？」

もたついている勇氣。

ガヤがやじを飛ばし出す。

男子生徒A「何やってんだよ。早くしろよ」

おばちゃん「あんた、混んでるんだから早く

してくんないと。どうすんだい？」

勇氣「……ちくしょう……あ……」

光一「じゃあこれで」

列の後ろにいた光一が、200円をお

ばちゃんに渡す。

おばちゃん「はい、ちょうど」

勇氣「おい、いいのかよ」

光一「うん。だって境くん、すごく食べたそ

うにしてたの見てたから」

勇氣「え？」

（回想始め）

食堂前のサンプルメニュー（食品サンプル）に釘付けになっている勇氣。

勇氣「（唾を呑む）なんて美味そうなカツカレーなんだ」

（回想終わり）

○同食堂・テーブル席

勇氣と光一が同じ席にいる。

勇氣はカツカレー（大盛り）。

光一は和食の定食。

勇氣「あ、確かに見てたな」

光一「うん。でしょ。ほら、食べよ！」

そう言い、光一は味噌汁を少し混ぜてから飲みだす。

勇氣「お、おう」

勇氣は、目の前のカツカレーに目を輝かせた。

勇氣M「カツカレーとにらめっこ）おいおいおい。このルーの輝きといい、サクサク

間違いなしのこのカツ。そしてほかほかの
白米。俺の新天地デビューにふさわしい一
品だぜ。んー匂いもたまんねえ（にやけ
る）」

光一「境くん？境くん？おーい」

にやついている勇氣に光一が顔を近づける。

勇氣「（驚く）うわっ！なんだよ」

光一「いや、ずーっと見てるだけだから、食べないのかなって。冷めちゃうよ？」

勇氣「うるせえな。俺のペースで食わせるよ」

光一「…」

光一はメガネをクイとあげて俯く。

勇氣「てか、お前なんなんだ？こんなだだった
広いのによ、初対面の俺と同じテーブルに
座っちゃってよ。馴れ馴れしいにも程がある
と思うぜ？お前、友達いないのか？」

そう言われた光一はテーブルを叩いた。

テーブルのコップに入った水が溢れる。

光一「ち、違う！と、友達くらい僕にだって

いるよ！」

勇気「かつかすんなって。あーあー溢れちゃったじゃんよ」

勇気は溢れた水を拭き始める。

光一「ごめん。僕はただ・・・」

勇気「いいよ。お前がどんな奴か知らないけど、今の反応で大体わかった」

光一「・・・」

勇気「名前は？」

光一「光一だよ。神藤光一。境くんと同じクラスで、映像制作部の部長で、今は学園のヒーローを・・・」

勇気「(遮るように)わかった、わかった。メガネの光一くん。いいか？」

光一「うん」

勇気「悪いけど、俺はダチを作る気はねえよ」
光一「え？」

勇気「そもそも俺とお前じゃ合わねえだろ。じゃあな」

そう言い勇気は、席を立つ。

一口も食べられていないカツカレー。

光一「ちよつと！カレーは！」

と、光一はすかさず勇気を呼び止める。

勇気「俺からの奢りだ」

そう言い、光一の言葉に足を止めることなく、食堂を後にする。

同じ食堂内にいた尾田くらら（16）が一連の流れを見ている。

光一「（ため息）奢るって200円は僕が払っただけだな。それに僕もうお腹いっぱいだし」

光一は元の席に戻る。

席に戻るとくららがカツカレーを食べている。

口を開けて二、三度見する光一。

くらら「？（ぼかんと頭を傾げる）」

光一「……」

光一は、危険な物を見るような目でくららを見る。

○ 同学校・一階職員室

理事長以外の職員たちが揃っている。
指導されている生徒も何人かいる。

和泉真希（25）と五十嵐真司（33）

ら教師が勇気について話している。

二人分のコーヒーを注いでいる五十嵐。

五十嵐「で、どうですか？和泉先生、転校生
は」

注いだコーヒーを和泉に渡す五十嵐。

和泉「うーん。そうですね。ちよつと一癖
あるというか今時じゃないというか」

五十嵐「へえ、といますと？」

和泉「なんか、今時の子にはない『何か』？
を感じたんですよね。なんだかわかんない
ですけど」

コーヒーを飲む和泉。

五十嵐「不祥事が理由でウチに来たそうです
から、その『何か』の違和感には気をつけ
た方がいいかもしれませんね」

それを聞いていた鈴木美沙子（42）

鈴木「ええー、そうなんですか？物騒ですね
え」

和泉「不祥事…」

鈴木「何かあったら頼りにしてますよ！大竹
先生」

鈴木の向かいのデスクにいる大竹勝政

(38)に話を振る。

大竹「任せてください！この筋肉がお応えし
ます」

鈴木「ステキ」

鈴木と大竹は笑い合う。

和泉「…」

五十嵐「和泉先生」

和泉「はい？」

五十嵐「何かあったら、頼りにしてください
ね」

和泉「はい、ありがとうございます。でも初
めて受けもったクラスですから自分の力で頑
張りたいんですよね！」

五十嵐「さすが、ご立派ですね」

五十嵐はコーヒー片手に立ち上がり、
窓の外を見る。

五十嵐「(カッコつけながら)ですが、何かあ
ってからでは遅いです。そうだ！対策を立
てませんか？今夜食事でもしながら」

そう言い振り返るが、和泉の姿は既に
ない。

五十嵐「あれ、」

○同学校・校舎内

広い校舎で迷子になっている勇氣。

勇氣「まったく、無駄に広い校舎だな。完全に
迷っちゃったぜ、まったく。地図とかねーの
か？」

校舎内を散策し始める勇氣。

○同学校・体育館

バスケットをしている男子生徒たちやバレ
ーをしている生徒がチラホラいる。

勇氣の元に、バスケットボールがバウ

ンドしながら転がってくる。

男子生徒 B 「あ、すみません！」

勇気はボールをキャッチして、キメ顔をした後、超ロングシュートを決める。

男子生徒たち 「え！？・・・（唾然とする）」

そのシュートに感激する生徒たち。

女子生徒 A 「何あの人！すごい！」

女子生徒 B 「かっこいいかも！」

女子たちの歓声にまんざらでもない勇氣。

勇氣 「ってこんなことしてる場合じゃないん

だよ。教室、教室！どこだ教室！」

そう言い、勇氣は慌てて体育館を出る。

男子生徒 A 「なんだったんだアイツ」

○同学校・一階廊下

廊下を走る勇氣。

勇氣 「やべえよ、初日早々サボることになっちゃまう！」

他の生徒たちは驚き、勇氣に道を開け

る。

勇氣「どいて！どいて！ごめんね！」

勇氣のことなんか気にもしていないカ
ップルが手を繋いで歩っている。

勇氣「悪い！通る！」

カップルの間を通る勇氣。

彼氏生徒「おい！お前！」

勇氣の走りによって一階の廊下が騒が
しくなる。

○ 同・職員室

騒がしくなっている廊下に不思議がる
和泉ら先生たち。

大竹「何か騒がしいですね」

先生一同「・・・（廊下の様子が気になる）」

勇氣声「うおおおお」

勇氣のシルエットが職員室の前を横切
る。

和泉「手を止めて」この声、まさか転校生？
五十嵐「え？」

先生一同、ドアを開けて廊下を覗き込む。

走る勇気の後ろ姿。

大竹「コラ！廊下は走るな！！」

その姿を見て和泉は、「ふっ」と笑う。

○同・二階廊下

一階から二階に繋がる階段を上る勇気。

上がった先の曲がり角で花村飛鳥（1

7）とぶつかりそうになる。

飛鳥「きゃ！」

ぶつかりはしなかったが、飛鳥は後ろに転けてしまう。

勇気「（反射的に）すみませんです！大丈夫ですか？」

勇気は倒れた飛鳥に手を差し出す。

飛鳥「いててて、ありがとう」

飛鳥は手を取り、立ち上がる。

勇気「……（気まづそう）」

飛鳥「君は大丈夫？」

勇気「あ、俺は全然大丈夫です」

飛鳥「よかった」

勇気「はい」

飛鳥「じゃあ行こっか」

勇気「はい、…え？どこに？」

飛鳥「君、転校生くんだよね」

勇気「はい。境勇気です」

飛鳥「(笑)私、探してたんだ境くんのこと」

勇気「え？」

飛鳥「もしかして転校早々、迷子になっちゃった？」

勇気「えっ迷子？迷子っていうか、まあ、そうですね」

飛鳥「やっぱり！この学校無駄に広いからさ、迷子になりがちなんだよね。私も入学したての頃はすぐ迷子になっちゃってたし、」

勇気「…」

飛鳥「あ、ごめん！私ばかり話してた。私、

花村飛鳥。よろしくね」

勇気「うっす」

飛鳥「私、委員長だから何か困ったことがある
ったら何でも言ってみてね」

勇氣「委員長。了解です」

授業開始のチャイムが鳴る。

飛鳥「あ！いけない！先生にも一応このこと
伝えてあるかさ、急いで教室戻ろっか！」

勇氣「あ、うっす」

○ 同学校・2年A組教室

授業を受けている光一。

勇氣の席は光一の前のため、空席の状
態に心配になっている。

その時、飛鳥と勇氣と一緒に教室に入
ってくる。

飛鳥「先生！境くん見つかりました！」

和泉「あー！よかった。境くん大丈夫？」

勇氣「あ、はい！大丈夫です」

和泉「うん。じゃあ、席着いて。授業進める

よー」

飛鳥「（小声で）じゃ（笑顔）」

勇氣「うっす（照れる）」

勇氣は席に戻る。

その様子を見た光一は、閃いたかの如く一冊のノートにペンを走らせる。

一方で、勇氣は少しそわそわしている。

○ 境家・リビング（夜）

境家は、一般的な一軒家。

境家の食卓には、メンチカツやサラダ、

味噌汁、ご飯がある。

勇氣「いただきまーす」

真美子（45）「はい、召し上がれ」

そう言い、真美子がキッチンから麦茶を持って来る。

麦茶を注ぐ真美子。

勇氣「あ、俺、牛乳」

真美子「ええ！注いじやったじゃん。あんた

そういうのは早く言ってよ」

勇氣「すまん」

真美子「いいよ、これ母さん飲むから。自分

で持ってきた」

牛乳を取りに冷蔵庫を開ける勇氣。

勇氣「（牛乳を手取る勇氣）ん？」

牛乳の賞味期限が切れている。

真美子「どした？」

勇氣、リビングに戻る。

勇氣「おいばばあ、これ賞味期限切れてんぞ」

真美子「ええ！うそ！」

勇氣「つたく、ほんとだらしねえな」

勇氣はご飯を食べ始める。

真美子「すみませんね」

黙々と食べる勇氣。

勇氣「何？」

真美子「あんた、学校は？」

勇氣「ん？」

真美子「ん？じゃなくて、どうだったの」

勇氣「まあ、普通だな。普通」

真美子「普通って、友達は？楽しくやってけ

そうなの？」

勇氣「うるせえな、飯がまずくなんだろ」

真美子「あんた、まだ引きずってんじゃない
だろうね」

勇気「…」

真美子「だとしたら、いつまで経っても変わ
んないよ」

勇気「…」

勇気は、味噌汁を一気に飲み干して立
ち上がる。

その後、ご飯とおかずを持って二階の
自分の部屋へ行こうとする。

真美子はその様子を不思議そうに見て
いる。

真美子「ちよつと何してんの？」

勇気「部屋で食う」

真美子「…（心配）」

○ 同・勇気の部屋

部屋はヒーローグッズが飾ってある本
棚以外綺麗に整頓されている状態。
ヒーローグッズには埃がかぶっている。

部屋に入る勇氣。

持ってきた食器をテーブルに置く。

勇氣はシャツを脱ごうとする。

この際に、姿見に写った自分をふと見る。

真美子の言葉を思い出す。

真美子声「いつまで経っても変わらないよ」

本棚にある写真立てに目を配る勇氣。

写真には勇氣と大木正義（16）が笑

顔でヒーローのポーズをとっている姿

がある。

勇氣「そんな顔で見るなよ」

その後、勇氣はモヤっとした気持ちで

ご飯を食べ始める。

○八ノ谷高等学校・2年A組教室（夕方）

授業終わりのチャイムが鳴る。

数学の難問に頭を悩ませている勇氣。

光一「ねえ境くん！この後空いてる？」

勇氣「なんでだよ」

光一「見て欲しい物があるんだ！」

勇気「見て欲しい物？俺に？」

光一「うん！」

勇気「……」

○同学校・映像部部室

部室は、カメラや照明機材など映像を制作するのに必要最低限の物が揃っている。

勇気と光一が部室に入ってくる。

光一が部室の電気を点ける。

光一「ようこそ！映像制作部へ！」

勇気「お、おう」

光一「境くんさ、もうすぐ転校してきて1ヶ月になるけど部活決めた？」

勇気「そーいやまだだな、ってまさかお前」

光一「（笑う）」

勇気「いやいや、俺はだるいからそういうのパスで」

そう言い、勇気は帰ろうとする。

光一「ウチの校則！」

勇気「は？」

光一「この学校は部活絶対なんだ。『青春謳歌』

それが理事長のモットーでさ」

勇気「『青春謳歌』ねえ、ドラマかよ」

光一「だからさ、あてがないならウチに入部してほしいんだ。部員も少なくて、ちょうど困っててさ」

勇気「(遮るように)メガネの光一くん」

光一「うん？」

勇気「何で俺なんだ？もっといるだろ。だいたい映像のことなんて一ミリも知らない。一ミリもだ」

光一「…」

勇気「まああれだ、とにかく他当たれよ」

光一はカバンからタブレットを取り出す。

光一「これ見て！」

タブレットには『神藤光一監督作 僕たちの青春ヒーロー(仮)』と書いてある。

勇気 「『ぼくたちのせいしゅんヒーロー

(仮)』？ヒーロー？なんだこれ？」

『ヒーロー』という単語に敏感になる

勇気。

光一 「次僕が作る作品。脚本・監督は僕。そ

して主演は境勇気」

勇気 「は？何言っちゃってんだお前」

光一 「いいから、見てみて！境くんにしか出

来ないんだこの役は」

勇気 「俺にしか出来ない…」

光一 「うん！境くん以外ありえない。モデル

境くんだし」

光一は輝いた目でそう言った。

勇気 「ヒーロー…」

そこに小森隼（17）が部室に入って

くる。

小森 「おつかれですー」

光一 「あ、小森！ちょうどいいところに」

勇気 「小森？」

小森 「だれですか？」

光一「この前転校してきた境勇氣くん」

勇氣「うっす」

光一「ほら、前言ったじゃん、僕たちのメシ

アが見つかったかもしれないって」

勇氣「メ、メ、メ、メシア？」

小森「あー君ですか！噂のメシアは！」

勇氣「メシア？あのおメシアってのは？どう

いう」

光一「メシアはメシア」

勇氣「メシア？」

小森「うんメシア」

勇氣「はあ…」

光一「部員は一応もう一人いるんだけど、今

日はたぶん来ないかな」

勇氣「一応？」

光一「うん、いわゆるゴーストってやつ」

勇氣「ゴーストねえ…」

光一「だから演劇部とか興味あるやつ誘って

何とか成立させてる状況なんだよね」

勇氣「苦勞してんだな」

小森「(早口で)神藤くんは天才です。シナリオの基礎はもちろん、激アツな展開や想像を裏切る舵取り。それに加えて緻密に作り込まれた世界観とキャラ。これに引き込まれない人々はもはや人としての感性を欠落しているとしたか思えません。そんな彼の作品だからこそ皆協力してくれるのです」

勇気「おおー、メガネの光一、お前すげえんだな」

光一「いやいや褒めすぎだよ」

小森「(少しキレ気味で)褒めすぎ？事実ですよ」

勇気「…」

光一「まあ、そんな感じなのがウチなんだ。だから、境くん」

勇気「ん？」

光一「読んでからでいい。もし気に入ってくれたら、ぜひ入部してほしいんだ」

勇気「わかったよ。暇だったら読んでいてやるよ」

光一「ありがとう！じゃあ早速だけデータで脚本送るからID教えてよ」

勇気「おう」

勇気と光一は連絡先を交換する。

この時、小森はつまらなそうな表情をしている。

○境家・勇気の部屋（夜）（朝）

勇気は光一から受け取った脚本を紙に起こしてホチキスで止めている。

勇気「『僕たちの青春ヒーロー』ねえ。よし、どれどれ」

勇気は脚本を読み始める。

黙々と読み進める勇気。

日差しが入り、気がつけば朝になる。

脚本を読み終えて涙する勇気。

勇気「あいつ…解ってるな」

同じ頃、7時にセットした目覚まし時計が鳴る。

朝日が本棚のヒーログッズを反射させ

輝かせる。

勇気「(ため息)でも、俺にヒーローは…」

○自由が丘高等学校・食堂(昼)

光一に頭を下げる勇気。

勇気「すまん！出来ない！」

光一「え！？やめてよ境くん。頭あげて？」

勇気「…」

光一「面白くなかった？」

勇気「いや、メガネの光一には才能あるよ。

面白かった。ヒロインと主人公の恋模様も

最後のアクション、それにヒ、ヒ、ヒーロ

ーの決め台詞もカッコよかった」

光一「ありがとう。ちゃんと読んでくれたん

だ。でも、じゃあなんで？」

勇気「それは…」

光一「うん」

勇気「俺には、資格がないんだ」

光一「資格？」

勇気「俺にヒーローの資格なんてない」

光一「え？これフィクションだよ？映画、お芝居」

勇氣「（悔しそうに）そんなのわかってる。でもな、例えフィクションでもヒーローをやるからには資格が必要なんだ。その資格が俺にはない」

そう言い、勇氣は席を立ち去る。

光一「そんな、ヒーローの資格があるかなんてどうやって証明すればいいんだよ」

○ 同学校・映像部部室

周囲を気にしながら何かを探している小森。

小森「あった！これで…僕も…」

小森は『神藤光一』と書いてあるUSBメモリを強く握り締め出ていく。

○ 同学校・映像部部室前

出て来る小森と鉢合わせするくらら。

小森「！？」

小森は、急ぎ足でその場を去る。

くから「…」

くからは、風船ガムを膨らませて小森を見ている。

【劇中劇 獣聖拳ライオンベラー】

○ スタジアム・昼

ラスボスに押されてピンチになっているライオンベラー。

ヒロイン「立って！ライオンベラー！」

ラスボスによって捕まってしまったヒ

ロイン。

ラスボス「正義のヒーローってのも案外大したことはないな。肩書きだけか？ええ？」

ラスボスはライオンベラーの右腕を踏

みつける。

ライオンベラー「うわあああ！！」

ヒロイン「ライオンベラー！」

ラスボス「ふははは、ライオンベラーここに敗れたり！」

劇中劇 N 「我らのライオンベラー！絶体絶命のピンチ！ヒーロー伝説はついに幕を閉じてしまうのか？彼を想う人々の祈りは奇跡を起こすことはできるのか！？次回獣聖拳ライオンベラー！……」

（回想） T・一年前

○ 境家・勇気の部屋

テレビを見ている勇気（16）。

ヒーローの敗北に啞然とする勇気。

勇気 N 「最強のヒーローだって負けてしまう回があるのは知ってた。次の回でパワーアップか何かしてリベンジする。これがお約束。でも、シーズン3のこのラスボスは勝てる気がしなかった。不安だった。そんな俺はこの回を最後に番組を観るのをやめた」

○ 勇気が転校する前の学校・教室（昼）

窓際の席で外を見ている勇気。

教室に菓子パンなどが入ったレジ袋を

持って入ってくる大木正義。

正義「なにスカしてんだ勇氣」

勇氣「別にスカしてなんかないよ」

正義「あ、そう？なあこれ見ろよ」

正義は袋から月刊コミックを出す。

勇氣「おおー！これ特別号？よく手に入った

ね」

正義「まあな？驚くのは早い、このページを

見よ！」

雑誌には特撮の特写写真特集が載っている。
いる。

夢中になる勇氣と正義。

勇氣N「大木正義。俺が高校に入って初めて出来た唯一の友人であり親友。正義は、まだ学校に馴染めていなかった俺を真っ先に気にかけてくれた。同じ特撮好きで意気投合した俺らはすぐ仲良くなれた」

○ 同学校・体育館

正義が放ったバスケのシュートが決ま

る。

勇気らは授業でバスケットをしている。

正義「見たか俺のウルトラシュート！」

正義はシュートを決めた後、ヒーローの決めポーズをとる。

勇気「(笑) またやってるよ」

男子生徒たち「うおおおナイスシュート！」

男子生徒たちが正義を囲む。

男子生徒C「やっぱり頼りになるな正義は！」

体育教師「いやあ、お見事！なんでバスケットに入らない？」

正義「いつも言ってるでしょ先生。俺にはやることあるんです！」

体育教師「子どもたちの世話か」

正義「はい！」

勇気N「正義は人気者でいつも話題の中に入ってた」

○ 同学校・教室

授業の難問題を軽快に解く正義。

勇気N「成績も優秀で、ルックスもピカイチ」

女子生徒が惚れ惚れしている。

○正義の近所の家・茶の間

少し古びたアパート。

正義が楽しそうに、近所の家族の子ど

もたち二人の面倒を見ている。

勇気N「何でもこなせる正義は、部活には入らず『人助け』と言って、放課後はご近所のシングルマザーの子供の面倒を見ていた。母親は夜、外に働きに出ているためその代わりをしていたそうだ。これは無償での行いだった。母親は本当のヒーローのように感謝していたという」

○河川敷（昼）

勇気と正義が寝そべっている。

勇気N「そんなヒーローのような男が一度だけ俺に弱音を吐いたことがあった」

正義が拳を空に掲げる。

正義「なあ、勇氣」

勇氣「なに？」

正義「自分の行動が正しくないのかもしれないと疑問に思ったことってある？」

勇氣「え？」

正義「俺が正しいって思ってたことが、誰かの悪で、思いがけないところから新しい不幸が生まれているとしたら勇氣ならどうする？」

勇氣「え？ボクだったら……」

正義「……」

勇氣「ボクだったらその誰かと向き合ってみるかな」

正義「そっか」

勇氣「……」

正義「わりい！変なこと聞いた！」

勇氣「ほんとだよ。らしくないよ」

正義「らしく、ないよな（ふっと笑う）」

勇氣N「これが正義が最後に見せた笑顔だった」

○ 転校前の学校・教室（土砂降り）（昼）

どんよりとした雰囲気が漂う教室。

正義の訃報を知らせる女性教師。

泣きじゃくる女子生徒たち。

言葉を失う男子生徒たち。

泣きながら状況を収束させる女性教師。

勇気「……」

勇気は、悲しみと怒りの感情が込み上げていた。

二つの感情に押しつぶされ、吐き気を催し、勇気は教室を出た。

○ 同学校・男子トイレ

急いで個室に入り、勇気は便器に泣きながら吐いた。

そこに、不良生徒三人が笑いながら入ってくる。

不良A「いやあーまさか、ころっと自殺しちゃうなんてな。ちょっと遊んでやっただけ

なのによ（笑）」

不良 B 「俺、笑い堪えるの必死だった」

不良 C 「わかる！俺マスクしててよかった！
って」

不良たち「（下品に笑う）」

勇気は、個室で怒りを込み上げながら
全て聞いている。

不良 C 「ほんと、いい子ちゃんすぎて反吐が
出るよな」

不良 A 「でも、いじりがいのあるおもちゃ無
くなっちゃってショックだわー」

不良 B 「新しいの探さねえとな」

不良たちはトイレを出て行く。
少しして出て行った後を追う勇気。

○ 同学校・二階階段

一階に降りて行く不良たちを目撃する
勇気。

勇気「あいつらが…あいつらが正義を」

○路地裏（土砂降り）（夜）

土砂降りの中、不良たちの後ろから殴りかかる勇氣。

勇氣「うおおー！」

ただひたすら暴力を振るう勇氣。

勇氣N「気がついた時にはもう俺はアイツらを殴ってた。この感触はたぶん一生忘れない。…ものすごく苦しかった。正義に嫉妬する奴らは山ほどいた」

勇氣の拳からは血は流れ、不良ら三人はボロボロになり倒れている。

勇氣N「不良たちだけじゃない、そいつら全員の黒い部分が正義を殺したんだ。俺はそのことに気づいてやれなかった。あの頃、俺も正義に憧れていたから…」

勇氣も力尽きて倒れる。

パトカーのサイレンが鳴る。

（回想終わり）

○学校近くの公園（午後15時ごろ）

公園の原っぱで寝ている勇氣。

一滴の涙をこぼす。

そこへ犬のトウベエが駆け寄り勇氣の顔を舐め回す。

トウベエ「ワン！」

勇氣「うわ！な、な、なんだ！や、やめろ！」

本郷響（53）「わははは（笑）」

貫禄のある本郷がそこにいる。

勇氣「おっちゃんの犬かい？やめさせてくれよ」

勇氣に懐くトウベエ。

本郷「（ニッと笑顔）ウチのトウベエ可愛いでしょ」

勇氣「ええ、まあ」

本郷「（笑顔）で、キミはいつまでそうしてるつもりなんだい？」

勇氣「え？」

本郷「『迷子』っていう面構えだ」

勇氣「…」

本郷「公園ってのはいつ来てもいいよねえ」

勇気「あー、そうですね」

本郷「子供達の元気な笑顔、それを見守るお母さん、お父さん。どこを撮っても微笑ましいよね」

公園で遊んでいる家族や子どもたち。

本郷「私はね、そんな小さな幸せを見るたび『よし！私もまだ頑張れる！』ってなるんだ」

勇気はここで初めて子どもたちの声や

周囲の声に気づく。

勇気「（感動）はあ、何かいいな」

本郷「今見ているものが全てじゃない。目を閉じて深く深呼吸、そして視野を広げる。すると見えなかったものが見えてくるだけじゃなくて、見えなかった自分も見えてくる。やってみるといいよ。私もそうやって気づいてきた」

勇気「……」

本郷「たくさん迷え！そしてたくさん失敗しろ！そして今よりも強くなれ！なんてね」

そう言い、本郷は犬のトウベエと去る。

勇気は本郷の背中に深く礼をする。

勇気「今見ているものが全てじゃない。か…。

目を閉じて、深く深呼吸…：そして視野を
広げる」

勇気は、本郷の言葉を実践する。

家族の笑い声やありふれた小さな幸せ
に気づく勇気。

子どもたちが小さい頃の勇気のように
ヒーローごっこをしている。

勇気M「俺は見えなかった自分が見えてきた。
憧れのヒーローを遠ざけていた自分だ。あ
の時から俺はずっと逃げていたのかもしれ
ない。これじゃ天国の正義に笑われちゃう
な。俺は…」

○ 同公園・歩道 A

その時、子供が遊んでいたボールが道
路の方へ転がって行ってしまった。

乗用車が走行中だが、子供は気づかず

飛び出しそうになる。

勇気「！？（鋭い目）」

視野を広げていた勇気はすかさず走り出し、子供を助けに行く。

勇気「つかまれ！（子供を歩道側へ引っ張る）」

乗用車が急ブレーキをかける。

勇気「うおおー！ウルトラキック！」

子供を助ける最中、転がったボールを反対車線側の歩道に蹴る。

○ 同公園・歩道 B

下校中の飛鳥が、反対歩道で勇気の救出劇の一部始終を目撃する。

飛鳥「え？あれ、境くん！？」

蹴ったボールは反対歩道走行中の自転車に直撃する。

走行中の自転車は横転する。

飛鳥「えええええ！？だ、だ、だいじょう、ん？」

飛鳥は倒れた自転車乗りの男性の元へ駆け寄るが、辺りには女性物のバッグ

や財布が散らばっていることに気づく。

飛鳥「これって：」

そこへ、警官二人が来る。

警官「すみません！ご協力感謝いたします！」

飛鳥「いえ、私は何も：」

警官「ほら、立て！」

警官はひったくり犯を連行する。

飛鳥「境くん、あの距離から：」

転がっているボールを飛鳥は拾う。

○ 同公園

助けた子供の母親にお礼をされている

勇気。

母親「本当にありがとうございます！」

勇気「いえいえ！」

母親「ほら、あんたも！」

子供に頭を下げさせる。

子ども「ありがとう。兄ちゃん、かつこよか

った！」

勇気「（照れる）おう！気をつけろよ」

子ども「うん！じゃあね」

親子は勇気に手を振りながら帰る。

勇気「（呟くように）カッコよかったかあ」

飛鳥「カッコよかった」

勇気「うん、でしょ！」

振り向くとボールを持った飛鳥がいる。

勇気「は、花村さん！」

飛鳥「すごいね境くん」

勇気「いやいや、そんな」

飛鳥「なんかヒーローみたいだったよ」

勇気「ヒーロー！？」

飛鳥「うん、あの特撮？とかの」

勇気「（たまらなく嬉しい様子）」

飛鳥「境くん？」

勇気M「そうか、これか正義まよよし。ようやく俺も

ここに立ってわかったよ。やっぱり俺はこ

っちだ」

勇気「花村さん！」

飛鳥「うん？」

勇気「ありがとうございます！」

飛鳥「え？」

勇氣「俺、ずっと迷ってました。でも、もう

迷いません！俺は、やっぱりこれからもヒ

ーローになるのを止められない！だから、

絶対見てください俺の、青春ヒーロー！じ

ゃあ！」

そう言い勇氣は全速力で学校に向かう。

飛鳥「(フツと笑う)なにあれ。ヒーローか(笑

顔)」

○八ノ谷高等学校・職員室(午後16時ごろ)

慌てている光一が若林泰明(41)と

話している。

光一「だから無いんですって！先生、いつも

掃除してるでしょ僕たちの部室」

若林「掃除はしてますが、神藤くんのデータ

なんて触ってませんよ？だって『サワル

ナ！』って書いてあるでしょ？」

光一「先生じゃなかったら、誰っていうんで

すか」

和泉「何の騒ぎですか？若林先生」

若林「いや、あのですね、神藤くんがですね」

光一「ゴースト…」

和泉「ゴースト？」

若林「ん？」

光一「ゴーストですよ！先生！」

和泉「え？おぼけ？」

若林「ああ！ゴーストなら考えられますね！！」

光一は頷き、職員室を急いで出て行く。

和泉「え？なんなんですかゴーストって」

若林「いわゆるゴースト部員ですよ。和泉先

生（お化けのジェスチャー）」

引く和泉。

顔をひよっこり覗かせる五十嵐。

○ 同学校・校舎内

ゴーストを探し回る光一。

その様子を何者かがカメラで録画している。

○ 同学校・校門前

同じ頃、勇気が校門を走り抜けて校舎
へ向かっていく。

○ 同学校・2年B組教室

探している最中、光一は教室に小森が
いるのを見かける。

小森は、パソコンで一人黙々と作業を
している。

教室に入る光一。

光一「小森、こんなところで何やってるの？」

小森「神藤くん、てっきり帰ったのかと、」

光一「？大変なんだよ、僕のデータがもしか
したらゴーストに、」

小森「ゴースト？」

光一「そう、だから一緒に、探して…」

小森「（笑い出す）」

光一「ん？どうしたの？」

小森「おかしいですよねえ、友人のピンチだ

というのに、こんなに笑ってしまうのは」

光一「……？」

小森「データの居場所なら知ってますよ」

光一「え？」

小森「ほら、ここに（小森のパソコンを指差す）ゴーストの仕業なんかじゃありません」

パソコンには、光一のメモリが挿さっている。

画面上にはデータを盗作して作った台本がある。

光一「これって…小森、どうゆうことだよ！？」

小森「そうゆうことですよ」

光一「は？」

小森「神藤くん、キミはあまりにも才能があまりすぎる」

光一「……」

小森「だから僕はキミのその才能がずっと羨ましかった。選ばれるのはいつも神藤光一で僕じゃない。キミがいる限り僕が日の目を浴びることはないと思ってた。でも、一

っだけ方法があるって気づいたんです」

光一「小森？」

小森「僕がキミになればいい」

光一「何を言ってるんだ」

小森「何度も言わせないでくださいよ。そう
ゆうことですよ。キミの頭は僕がもらう。

キミのアイデアがあれば僕だって褒め称え
られ、期待されて、多くの人が僕の作品に
協力してくれる。まさに僕の憧れのシナリ
オだ」

光一「小森：きみは：」

小森「そうになったら：神藤光一はもういらな
い」

そう言い、メモリを外へ投げる。

光一「あ！」

勇気「うおおおー！ー！！」

そこへ、勇気が飛び込んでメモリをキ
ヤツチする。

光一「境くん！？」

勇気「よっ！メガネの光一。元気そうじゃね

「か」

光一は涙を流している。

小森「これだから不純物は……」

勇気「（フツと笑う）そうだな、不純物かもな。

俺もお前もな」

小森「なに？」

光一「……」

勇気「お前のシナリオに、ヒーローが助けに来る展開はなかったようだ」

小森「ヒーロー？なんだそれ。僕が悩んでいる時、困っている時、助けになんて誰もこなかった」

勇気「だったら俺が助けてやる」

小森「はぁ？」

光一「……」

勇気「悔しかったら、お前のその頭で勝て！何回も何回も作って、そしてみんなを見返せ！こんな姑息な手を使うんじゃないよ！」

小森「何なんだお前！」

勇気「俺は境界勇気だ！そして……（深く息を吸

う」

(フラッシュバック)

勇気は、ヒーローに憧れている自分や正義のことを一気に振り返る。

勇気「お前が今、踏み込もうとしているその道を全力で俺が押し戻してやる。それが俺のやり方だ」

小森「ほんと、なんなんだよ(悔し涙)」

小森は教室を出て行く。

○ 同学校・教室前廊下

出て行く先にカメラを持ったくかららがいる。

小森「！？キミの、ゴーストの仕業にすればよかった」

そう言い、小森はその場を去る。

その後ろ姿をカメラで録画するくからら。

くからら「いい画」

そう言い、教室を覗くくらら。

くらら「境勇氣。やっぱり面白そう。クク（笑）」

○ 同学校・教室

メモリを光一に渡す勇氣。

勇氣「ほらよ、大切なものだろ？」

光一「ありがとう！境くん！」

勇氣「勇氣でいいよ」

光一「え？」

勇氣「俺は決めた。今度こそダチのために、必要としてくれる誰かのためにヒーローになるってな。だから、俺にやらせてくれ『青春ヒーロー』の資格があるなら」

光一「ダチって…僕たち…」

勇氣「ああダチだ！」

光一「（嬉し涙）もちろんだよ！勇氣くん！キミこそ『青春ヒーロー』だよ！」

勇氣「（ニツと笑う）よろしくな！光一！」

光一「うん！え？今、光一って…」

二人は戯れ合う。

○ 境家・勇気の部屋

勇気はテレビで『ライオンベラー』を
見ている。

ライオンベラー「皆の祈りが俺を強くしてく
れた。絆が、想いが今ここに一つになる！
くらえ！『必倒奥義！起死回生聖拳劍ジャ
ステイスホープ！！！！』」

ラスボス「くわあああ！」

劇中劇 N「こうして平和は守られたのであつ
た。ありがとうライオンベラー！これから
もこの世界を守り続けてくれ！彼の闘いは
これかも続く！」

涙しながら拍手する勇気。

勇気「最高だあ、この展開は読めなかった。

シーズン3これは後世に語られるぞ」

真美子声「ちよっと勇気！もう支度したの

ー？遅刻するよ！」

一階から真美子の声がする。

勇気「やっべ！」

急いで着替える勇氣。

その際に正義との写真を見る。

勇氣「行ってくるぜ」

勇氣は部屋を出る。

埃がかぶっていたグッズ棚が綺麗にな
っている。

○八ノ谷高等学校・食堂（昼）

200円をカウンターに出す勇氣。

勇氣「おばちゃん！カレー大盛りで！」

本郷「大盛りね、はいよ」

コックの格好をした本郷の姿がある。

勇氣「おっちゃん！？なんでここに？」

本郷「なんでって、ここは私の学校だからね」

勇氣「え？もしかして」

本郷「（ニツと笑顔）理事長の本郷響です。若

者よ『青春謳歌』してるかい？」

勇氣「（キメ顔で応える）」

光一声「よーいアクション！」

○ 同学校・校舎内（昼）

『僕たちの青春ヒーロー』撮影シーン。

悲鳴をあげて逃げ惑う飛鳥ら生徒たち

○ 同学校・屋上

白いマフラーに赤と青を基調としたヒ

ーローに扮する勇気が校舎を見下ろす。

光一から通信が入る。

光一「気をつけて！奴らは学校内のどこかに

いるはず！」

勇気「了解（通信を切り、深く深呼吸）ヒー

ローになるのは俺に決まってるだろうが

っ！」

勇気はそう言い現場に向かった。

（終）